

〈研究ノート〉

恠代英をめぐる最近の研究動向について

砂山 幸雄

はじめに

恠代英（1895～1931）は、中国共産党の初期の指導者のなかではかなりよく知られた人物であろう。恠は武漢における五四運動のリーダーとして学生を指導し、また中国社会主義青年団の機関誌『中国青年』の主筆として革命を志す多くの青年たちを激励し、さらには国家主義者や国民党右派との論争で名を馳せた。また、その悲劇的な死のゆえもあって、近年はTVドラマや演劇の主人公として取り上げられるようになった¹。

しかし他方、恠代英はアナキズムや空想的社会主義からの影響の強い諸活動に固執し、中国共産党の創立過程に関与することはなかった。そのため、恠の入党以前の思想と行動の評価については、中国の研究ではいささか曖昧なままにとどまっている。中国では、恠の顕彰を意図した研究の多くが、彼の多面にわたる言説と行動のなかから「先進的要素」を切り出し、それをのちの「無産階級革命家」としての優れた特性に結びつけて論じてきた。

中国における本格的な恠代英研究は1980年代初めから始まったが、その中心になったのは田子渝（湖北大学）、李良明（華中師範大学）など地元の大学の党史・政治教研室系統の研究者であり、彼らは生誕百周年、百十周年といった節目の年ごとにシンポジウムや座談会等を開催して、恠代英の功績の宣伝・顕彰を行ってきた。これらの活動の成果が実って、2014年には全9巻からなる『恠代英全集』（恠代英2014）が「中国共産党先駆領袖文庫」の一集として人民出版社から刊行された。同「文庫」は、中国共産党創立90周年を記念して「共和国成立前に死去した無産階級革命家の著

1 2000年にTVドラマ『恠代英』が中国テレビ金鷹賞中編ドラマ部門1位に選出されている。2015年には華中師範大学が話劇『恠代英』を制作・上演し、2016年には南京市話劇団が恠代英を主人公とする話劇『雨花台』を制作し、北京、上海等各地で上演した。

作を集中、整理し、系統的に出版する」という建国以来初の企画であり、本校執筆時点ですでに陳独秀、蔡和森ら20人の著作が出版されている²。これらのうち、「全集」は李大釗、方志敏と惲代英の3人のみであり、そのなかでも惲代英の全集は大部に属する。こうした「先駆領袖」の著作物の整理、出版が今頃行われるようになった背景には、人民共和国成立以前の路線闘争や権力闘争、人的関係などの様々な「しがらみ」が次第に過去のものとなり、客観的な歴史評価がある程度可能になったこととともに、これら「先駆領袖」の記憶自体が次第に薄れていくことへの関係者の危機感も反映されているようにも思われる。

こうした動向と関わって、最近の中国の惲代英研究には、より客観的に史実を検証しようとするもの、広く五四新文化運動のなかに惲代英らの活動を位置づけようとするもの、入党の前と後での惲の活動の連続と断絶に注目するものなど、従来の顕彰を目的とする研究（これらは依然として大多数を占めるものの）とは異なる新たな傾向も見られるようになった。また、惲代英が深く関わった少年中国学会や新村運動についての専門著作も相次いで刊行されており、今後新たな進展が期待できる状況が生まれてきている³。これに対し、日本では惲代英に関して1980年代から90年代を中心に一定の研究の蓄積あったが、今世紀に入ってほとんど研究されなくなっており、中国とは対照的である。後述するように、実は中国における惲代英研究の新たな動向は、日本のこれまでの研究と重なる部分があり（後藤延子や狭間直樹の論文が中国語訳されており、その影響も考えられる）、一部はそれをさらに発展させた研究もある。したがって、全集の刊行と相まって、中国における研究と呼応しながら、再度日本の惲代英研究を前進させる可能性が生まれてきたように思われるのである。

さらに最近、管見の限り惲代英に関する初の英文モノグラフ『近代中国における政治的知識人の台頭——五四時期の社団と大衆政党政治の起源』

2 この20名とは以下のとおり（出版年月順）。王尽美、向警予、高君宇、羅亦農、方志敏、劉志丹、陳潭秋、鄧恩銘、張太雷、蘇兆征、彭湃、李大釗、陳独秀、瞿秋白、趙世炎、蔡和森、惲代英、林育南、鄧中夏、王若飛。

3 少年中国学会に関する研究書に李永春（2005）、呉小龍（2006）があり、新村主義運動に関しては趙泓（2014）がある。

(Rahav 2015) が刊行された。著者シャクハル・ラハーブ (Shakhar Rahav) はイスラエル出身で、ヴェラ・シュウォルツ (Vera Schwarcz) がエルサレムのヘブライ大学で行ったセミナーを聴講して中国の知識人の役割に関心をもち、カリフォルニア大学バークレー校で葉文心のもとで学び、2007年にPh.Dを取得、現在イスラエルのハイファ大学で教鞭をとっている若手研究者である⁴。同書は惲の結社活動がローカルなレベルから全国的なレベルへと拡大していった軌跡を追い、そこに中国における「大衆政党政治」(mass-party politics) の出現を読み取るという、かなり大胆な試みを行っている。その内容についてはあとで詳細に検討するとして、ここでは著者が同書のなかで、自らの研究は、惲代英ら地方の若い知識人が「共産主義などのラディカルなイデオロギーを選び取った動機」ではなく、彼らが「その理想を実現しようとして採った方法に関心がある」(Rahav 2015: 6) と述べている点に留意したい。「思想よりも実践に焦点を合わせることは、目的論を回避するのに役立つ」(Rahav 2015: 11) と述べているように、これは、ともすればマルクス主義の普及や共産党の台頭を目的論的に焦点化しがちな五四運動研究の傾向を免れるために、著者が採用した方法論である。それが成功しているかどうかはさておいても、新文化運動を含んだ広義の五四運動研究をグローバルな意義を持つ開かれたフィールドにするためには、この著者の試みは有意義ものであろうと考える。

本稿では、このラハーブの著書の検討を中心に据え、これが中国・日本の研究に対しどのような意義を持つかを考察する。そのために、まず日本および中国における研究状況を簡単に整理することから始めたい。

1 日本における惲代英研究

日本で研究対象として惲代英を初めて取り上げたのは、中国文学研究者秋吉紀久夫(1978)の論文であった。秋吉は『新青年』『少年中国』『中国青年』など当時利用できた資料のなかから惲の文章を発掘し、惲代英の青年期および共産党員時代の思想と主要な活動について紹介した。それ以来、惲代英に関する主要な論文は1980年代前後から90年代の間に集中して

4 ラハーブには、のちの著書の一部の原型となった中国語の論文(夏海2005)もある。

いる。また、その関心は中国共産黨員として活躍する以前の青年惲代英の思想およびその転換に集中していると言って良い。

それらのうち、小野信爾（1979）は五四新文化運動の精神的基調を「理想主義」と捉え、この精神をもっとも典型的に代表する青年として惲代英の思想的軌跡を跡付けた。小野によれば、アナーキズムの影響を強く受けていた惲代英がマルクス・レーニン主義を受容するにいたった原動力こそこの「理想主義」であった。この小野論文は日記等の資料が利用できない段階で、「無産階級聖人」との称もあった惲の精神的面貌を的確に捉えた優れた業績であったといえることができる。

日本で惲代英を最も精力的に研究してきたのは後藤延子である。後藤（1982）は、惲代英の五四運動前夜の思想を人生論・道徳論、認識論・思考方法論、理想社会論の領域に分け、それらの各領域で彼の思想形成に対しアナーキズムを含む内外の諸思想がどのような影響を与えているかを検討した。この論文も、日記等の資料が十分利用できない段階で、多様な思想・学理から養分を吸収して形成しつつあった惲代英の思想の独自性に注目した先駆的な業績といえることができる。後藤は1987年に開催されたシンポジウムにおいて、五四時期の青年たちの考えているアナーキズムと「私たちが考えるアナーキズム」とは大幅に違うのではないかという重要な指摘も行っている（後藤1987：77）。

1980年代に入り、日記（惲代英1981a）、書簡集（惲代英1981b）、回想録（人民出版社編集部1982）、2巻本の文集（惲代英1984）などが相次いで刊行されて、惲代英に関する研究環境が整うと、これらを活用した研究が出始めた。姫田光義は『惲代英日記』の紹介を通じて五四運動研究に対して持つその資料的価値を知らしめ（姫田1986）、狭間直樹と砂山幸雄は、いずれも惲代英のアナーキズム受容という問題に挑んだ。このうち、狭間（1989）は、「惲代英が理解したアナキズムは、理論というよりはむしろその精神といったほうがふさわしいに見える」とし、アナーキズムを信奉する一方で、家族道徳中の「孝慈」や「陽明の致良知の説」といった「儒教の精華」を継承しようとする惲の精神のあり方から、この時期のアナーキズムの「時代性」を読み取ろうとした。

これに対し砂山（1989）は、中国の大衆的なナショナリズムの勃興期に

国家を否定するアナーキズムが青年層に広く浸透するという逆説的状况を解明するために、惲が自らのアナーキズムについて、それがアナーキズムを信奉する者のいうアナーキズムとも、アナーキズムを信奉しない者の思い浮かべるアナーキズムとも違うと告白していたことに注目した。砂山は日記の分析を通じて、惲代英が「散沙社会」と揶揄された中国社会を強固な社会へと改造するための鍵をクロボトキンの相互扶助論の中に密かに見出したとし、それを互助社に始まる結社活動によって実現しようとしたと論じた。

後藤延子もまた1990年代にはいつてから、『惲代英日記』を読み込みこみ、惲代英の思想形成に影響を与えた中国の伝統思想と西洋思想の双方の要素について、緻密な考察を行った。後藤（1994）は日記を書くという行為そのものを狙上に載せ、惲が彼自身（および彼の日記を読むことのできる周囲の者）の道徳的修養のために日記をつける習慣を利用したこと、それは外見的には曾国藩日記に見られるような伝統的な功過格に範をとりながら、めざすところはそれとは「全く接点を見出せない異質なもの」——近代的と呼んでもよいものであること、また、その理想とする人間像の新しさはフランクリン自伝の閲読やYMCAとの接触の中からヒントを得た可能性があることなどを指摘した。

後藤（1995）はさらに、日記の中に頻繁に登場するキリスト教に関わる記述から、惲がキリスト教の中に何を見出したかを考察する。「最良の非キリスト教徒」たらんとする惲は、YMCAを通じて面識を得たキリスト教徒の高潔な人格や「発奮有為」に羨望しながらも、キリスト教における「上帝」に対応するものを陽明学の「良知」に見出した。この点は砂山もすでに指摘していたが、後藤はさらに日記のなかでは「良心」の語が次第に「良知」を圧倒して頻出するようになることに注目し、惲が目指した方向は、「天理」とセットとなるべき陽明学の「良知」ではなく、「人間の内にある道徳的立法者としての良心」を備えた「自由で自律的な人間」であったと結論づける。後藤は「互励文」の朗誦から始まる互助社の活動についても、YMCAからの影響を指摘している。このほか、後藤（2003）は日記を活用して、武漢五四運動の指導者としての惲代英の活動を、その揺れ動く心理状態も含めて詳細に跡付けている。後藤のこれら一連の研究は、日本にお

ける惲代英研究の水準を示しているといえよう。

日本の研究はこのようにほぼすべてが中国共産党入党以前の惲代英の思想と行動に限定されていることが特色である。そのうち、小野、狭間、砂山の研究はいずれも、まだ形成途上にあった惲の思想をアナーキズムを軸として捉えようとした。その捉え方はそれぞれ異なっていたが、そこに将来の革命活動を準備する導線を見出そうとした点は共通である。これに対し、後藤はのちのマルクス主義受容との関係の考察を急ぐより、五四時期の惲の思想世界を掘り下げ、より多様な思想的バックグラウンドを明らかにしようとしたと言える。日本の研究においては、入党後の惲の活動と思想、あるいは五四運動期と黨員としての活動時期の間の継承と断絶について、正面から取り上げた研究は未だにない。

II 中国における研究動向

中国における惲代英研究は前述のように顕彰という目的を主としていることは基本的に変わらないが、論文数は急増している⁵。その一つの集大成が、全集編纂の中心となった李良明等の共著（李良明ほか2011）であろう。同書は、惲代英の思想を、哲学、政治、経済、軍事、文化、教育の6分野に分け、惲の生涯を通じてそれぞれ詳細に論じている。ここではいちいち紹介するゆとりはないが、マルクス主義を受容するまでの政治思想の例を挙げれば、「主要問題」として、マルクス主義受容以前の惲の思想はアナーキズムであったのか、それともブルジョア民主主義であったのかという問題が取り上げられている。その分析は詳細ではあるが、アナーキズムのなかの何が、あるいはブルジョア民主主義のなかの何が惲の思想の核心であったのかを問う日本の研究の視点から見ると、関心の方向や掘り下げの深浅においてギャップを感じざるを得ない⁶。

ここでは、日本の研究および後述のラハープの研究と深く関わる幾つか

5 CNKIの「中国期刊全文数拠庫」で主題を「惲代英」として検索し、2001年から2015年まで5年ごとに論文数を数えると、90、124、199と編数が急増している。

6 惲代英生誕120周年に際して書かれた研究レビューは、問題点の一つとして、惲の経済思想については経済学者が、哲学思想については哲学研究者がそれぞれ研究しているが、惲代英の専門研究者が少なく研究が深まらないことを挙げている（段玉2015：122）。

の研究に限って紹介しておきたい。

まず興味深いのは、惲の道徳修養の活動と伝統思想との関係を検討した鄧軍（2012）の研究である。鄧は、惲代英の互助社・利群書社を通じて実践した「道徳嚴格主義と苦行」には「政治秩序を道徳秩序の展開とみなす（政治は人格の拡大とみなす）宋明理学」の思考パターンが体现されていると考える。この思考パターンは、清末・民国初の儒家思想の衰微にもかかわらず知識人に継承されており、19世紀に復興した心学の「道徳嚴格主義」の風気を幼時に母親の薫陶により身につけた惲は、中華大学在学中の頽廢した時代風潮のなかで「道徳的自省に対し異常に敏感になった」。鄧はさらに「生命を革命の祭壇に置くことは惲代英の道徳理想主義の隠された含意であった」として、惲の犠牲の意味を、この道徳嚴格主義と「1920年代以降の中国共産主義の革命情熱」との結びつきのなかで捉えようとした。鄧のこの見解は惲の思想の近代性を強調する後藤延子の見解とは対立するが、短い生涯を通じた惲の思想実践に伝統思想のある部分の継承を見出そうとした点で、中国の惲代英研究の中で異彩を放っている。

鄧軍はまた最新論文（鄧軍2016）で、「組織」の観点から惲代英らの社団活動とその挫折の意味を検討している。鄧は、惲らがYMCAの活動のなかに組織的有効性を見出して互助社を結成したこと、キリスト教の神に当たる「組織の最高律法」として「良心」を措定したこと、しかし、少年中国学会や工読互助団の活動では「天理」を持たない「良心」は有効性を発揮できず失敗に終わったこと、そのため「良心」かわって「主義」を中心とした組織化をめざすようになり、「主義」の選択を迫られたこと等を跡付けたうえで、さらに、惲がマルクス主義受容を最後まで留保した理由として、一つは階級闘争が特定の階級の個別利益のみを考慮するもので「全人類の幸福」追求ではないと考えていたこと、もう一つは「革命」とは「流血と恐怖」を意味する最後の手段であって、中国が必要とするものは「破壊」でなく「建設」であると考えていたことを挙げている。惲にとってマルクス主義の選択とは、「理性と感情における自己説得の困難な過程」であったが、一度選択した以上は「この主義に身を委ね、この主義を奉じる団体に身を委ね、行動の中でこの主義の有効性を検証しようとした」（鄧軍2016:78）。鄧のこの論文は、やや図式化しすぎている嫌いはあるものの、

日本での研究ともラハープの研究とも交差するところの多い（おそらくそれらからの影響も推測できる）研究であるといえる。

中国共産党の創立と恠代英の關係については、李良明（2016）が、従来からの持論をより積極的に展開している。恠は中国共産党が上海で創立大会を開催したほぼ同時期の1921年7月15日から21日にかけて、利群書社の影響下にあった23名の青年を湖北省黄冈（利群書社のメンバーであった林育南の故郷）の浚新小学に招集し、「共存社」の結成を決定した。その宗旨は「積極着実な準備によって階級闘争、労農政治の実現を求め、それによって円満な人類共存を目的とする」というものであり、「組織は国家のように厳密である」と唱って民主集中制の革命組織を志向したものであることは間違いない。これについて李良明は、中国共産党創立大会で採択された綱領の「精神と完全に一致する」とするとし、上海で中国共産党が結成されたとの報せを聞くや、「恠代英、林育南らは非常に興奮し、ただちに共存社の解散を協議した」と述べている。成立まもなく解散してしまった共存社の歴史的意義は、李によれば「たとえコミンテルンとソ連の支援がなくても、中国は遅かれ早かれプロレタリア階級の政党を設立したであろう」ということを証明している点にある。

恠代英の入党時期については、1921年夏、同年冬、1922年春など諸説ある。李良明らの手になる年譜は、張浩（林育英）が1938年に記入した黨員登記票に「恠代英と林育南の紹介により1922年2月に入党」とあることを根拠に、恠の入党時期を1922年2月以前と断定している（李良明・鐘德涛 2015：195）。しかし、中国共産党設立の準備工作を進めていたコミンテルンと陳独秀は、1920年の夏から冬にかけて武漢の恠らに対して直接もしくは武漢の共産主義小組を通じ二度接触を図っていたことが知られている。それ例外にも、互助社のメンバーで当時北京大学生として共産主義グループに加わっていた劉仁静との通信があったことをふまえると、中国共産党の創立を知ってただちに入党意思を固めたとは考えにくい。そこには鄧軍が指摘した理性と心理面での葛藤を含めて、入党を躊躇させる種々の要因があったと想像できるのである。この点を考慮すると、恠代英の入党時期はもっと遅く、22年8月ではないかと推定する潘大礼（2015）の見解が注目される。潘は、林育南自身の入党は、林が学生代表として出席した極東

諸民族大会（モスクワ、1922年1月21日～2月2日）以後であり、また中国共産党武漢支部の責任者だった包惠僧の回想にも、22年春に林育南が入党し、引き続いて惲ら共存社のメンバーが入党したとあることを根拠に、惲の入党は、四川瀘州の川南師範在職当時の22年8月、学校の図書備品等を購入するため上海に赴いた際、陳独秀と鄧仲夏の紹介によるものと推定している。

入党時期に限ればわずかなズレに過ぎないように見えるが、党の設立工作段階から数えれば、2年間近くに及ぶ「理性と感情における自己説得の困難な過程」と見ることもできる。1921年10月、惲は四川に赴任するに際し、当時宣伝委員であった黄負生に対し、武漢支部の個別の人物ややり方に疑問を感じるので、自分の入党の問題は直接上海と連絡を取って解決するつもりだと語ったと伝えられているように（中国革命博物館1980：261）、イデオロギーの選択以外に、人柄や手段に関わる要素も惲代英にとっては重要だったことが想像できる。

これに関わってさらに検討する余地があると思われるのは、惲代英と陳独秀の関係である。中華大学在学中の1917年、惲は早くも『新青年』に2編の文章を発表しており、日記にも同誌編集長の陳独秀から文章を賞賛する手紙を受け取ったという記述がある。また1919年の王光祈あて書簡のなかで、「私は『新青年』や『新潮』を読むのが好きです。なぜなら、それらは自由、平等、博愛、互助、労働の福音を宣伝しているからです」とも書いている。さらに、1920年10月頃、陳独秀からの依頼でカウツキーの『階級闘争』を翻訳し、新青年社から出版している。これらの事実から、惲代英と陳独秀との間には長期にわたる（主に書簡を通じた）交流があったと見られてきた。惲の共産党入党もこの交流の延長線上に考えられてきたと言ってよい。

しかし、この両者の関係に疑問を唱えたのが張艶麗・張建新（2008）である。張艶麗らは『独秀文存』等に惲代英宛の書簡が見当たらないことから、両者の頻繁な文通という通説に疑問を投げかけ、また『新青年』誌上に掲載された惲の文章は2編のみであり、「文学改良」の提唱などの「離経叛道」の思想に当初、惲自身が必ずしも全面的に賛成ではなかったことも指摘している。同論文は、さらに、1919年の日記に何度も登場する「仲甫」

が陳独秀（字は仲甫）を指すのかどうかについても疑問視する⁷。張らは、日記原文の文字の判読に問題がある可能性を示唆しており、これに止らず日記全般の校訂についても見直しの余地があることがわかる。さらに同論文は、1920年2月陳独秀が武漢を訪れた際、惲と長時間面談したという通説に対しても婉曲に問題提起を行っている。同論文では指摘されていないが、日記の1919年8月29日には、北京の大学教授は多くが“驕”“滑”“濫”“弱”の病を免れておらず、「皆吾が理想中の人物に非ざるなり。ただ〔胡〕適之、〔梁〕漱溟両先生が最も優なり」との記述があり、惲の『新青年』知識人に対する評価を垣間見ることができるようと思われる⁸。

このように、最近の中国における惲代英研究の中には、惲が『新青年』の圧倒的な影響下に成長し、やがてアナキズムや空想社会主義からの影響から脱却してマルクス主義の真理を認識し、中国共産党に参加していくという図式と齟齬するような研究も少数ながら生まれてくるようになった。従来の顕彰と宣伝という研究目的から距離を置いて、より客観的な実証研究を進めようという機運がしだいに形成されつつあるのを見てとることができる。こうした中国における研究の進展は、中断したままの日本の惲代英研究の刺激にもなることが期待される。

Ⅲ ラハーブの新著をめぐって

冒頭で紹介したラハーブの書は、すでに英語および日本語による書評がある。これらの書評については後述するとして、まず、本書の概要を紹介し、その論点について考察したい。

著者は「イントロダクション」で、五四運動研究を手短に振り返った上で、

7 日記の1919年2月10日の条に「寄仲甫信、勸其温和」とあるが、16歳年長の陳独秀に対する言葉遣いとして不適當であり、同年8月30日の条に「聘三、仲甫、育群と閑談す」とあるが、同日の陳独秀は北京の獄中であつたはずであり、この「仲甫」とは「仲清」（惲の妻の弟で、互助社メンバーであつた沈仲清を指す）の誤りではないかとし、『惲代英日記』の再版の際に修正するよう求めている（張艶麗・張建新2008：42）。しかし、この点は『惲代英全集』でも変わっていない。

8 章清は『新青年』が学生層にどのように読まれたかを検討するケーススタディとして惲の日記を取り上げ、「中心」の地位にいた北京大学の一群の人々が、中国の学術の質を高めるのに全力を尽くしていたにもかかわらず、こうした努力は必ずしも賛同を得ていたわけではなかった」と結論づけている（章清2014下：777）。

上述したように、本書の関心は五四時期の青年たちが共産主義などのイデオロギーを選んだ「動機」ではなく、彼らがその理想を実現しようとして採用した「方法」にあると述べる (p.6)。そのため、本書では、思想の分析はほとんど行われず、焦点は彼らによる社団の結成とその活動に置かれている。これには二つの側面がある。一つは社団の内部に目を向け、メンバーに共有された日々の行動を「濃密に叙述」すること、もう一つは、他の社団との相互交流に着目し、どのようなコミュニケーションが展開されたのかを検証することである。この作業を通じて、イデオロギーの相違を超えて彼らの間に共有された活動や基本的見解を明らかにし、当初はごく小規模の仲間集団に過ぎなかった社団が、のちに重要な政治勢力へと発展するようになった諸条件を浮き彫りにする。著者はここに1920年代から展開される中国の新しい政治様式——「大衆政治」(mass politics)あるいは「大衆政党政治」(mass-party politics)——のインフラが形成されていたと見るのである。

著者が本書で試みたことはもう一つある。それは、五四運動が北京・上海という「中心」から「周辺」へと波及したという古典的な見方を批判し、中心と周辺との間の相互交流の中で発展したという見解を対置することである。五四運動研究における「脱中心化」は、アメリカでは浙江金華生まれの施存統を取り上げた葉文心の研究 (Yeh 1996) で先鞭をつけられたが、著者はこの潮流を受け継ぎ、葉が着目した中心-周辺関係をこの時期の全国的な社団活動の分析枠組として適用しようとしたのである。

本書の第1章は、清末から民国初年にかけて内陸中心都市の武漢で進行した政治改革の動きが、どのように惲代英ら五四青年の活動を準備したかを簡潔に説明する。張之洞が推進した教育改革は、改革に積極的な新しいローカルエリートの出現と相俟って、辛亥革命後に多くの「遺産」を残すことになるが、惲が入学した私立中華大学もそうした「遺産」の一つであった。慶應義塾で学び、福澤諭吉の教育方針の影響を受けた若い大学創立者陳時は、図書館の充実、課外活動の奨励、学報の発行にも力を注ぎ、惲代英はそれらに積極的に参加するなかで成長していったことがわかる。とくに『光華学報』の編集では、読者とのコミュニケーション重視というのちの『中国青年』主筆惲代英の片鱗がすでに示されていることが指摘されて

いる (pp.43-44)。

著者はこれまでの研究が五四時期の社団を単に「中国共産党の苗床」と見るのみで、それ自体を十分に研究してこなかったと批判し、続く第2章では恠代英が互助社をどのように立ち上げ、運営していったかを「厚く記述」する。著者は道徳修養を核とする互助社の活動について、陽明学などの伝統文化からの影響（日記の習慣や功過格など）と並んで、YMCAからの影響を強調している。この部分は著者が最も注力したところではないかと想像するが、これについて後藤（1994）（1995）、砂山（1989）がすでに詳述しており、とくに目新しくはない。しかし、互助社の活動の一部であったハイキングや合唱、体育などレジャー活動を世界各国のナショナルリズム形成期に見られる共通現象としてとらえ、ここに新しい社会性（sociability）形成の一つの契機を見出している点が注目される（pp.71-74）。

第3章は利群書社の活動の詳細が記述される。利群書社は社員が共同生活を送りながら、『新青年』などの新文化関係書籍を販売する活動を行った。これにより、共同生活を通じて彼らの理想と実践を一致させるという目的と、書籍の販売を通じて新思想を社会に普及させるという二つの目的を同時に達成しようとした。著者は、利群書社は後者を優先させた結果、ビジネスとして一定の成功を取めたが、完全な自給自足の共同生活を達成できなかったと見る。しかし、新思想の普及に関して、書社はこの地域のラディカルな青年たちの交流の場となり、彼らのネットワークを形成するためのハブとして機能した（pp.104-105）。ラハープは言及していないが、利群書社が社員各自の生活費用は各自が負担することを原則とし、共同生活を完全な自給自足としなかったことは、あっけなく失敗に終わった工読互助団との大きな違いである。利群書社における「共同生活」も、新思想の普及という「社会への奉仕」と結びつかなければ個人主義的なものに止まるといふ恠の考え方には、たんなる道徳主義者ではない恠のリアリストとしての一面がよく表れている。

第4章は、恠を含め複数の利群書社メンバーが参加した少年中国学会での活動を扱う。本章のねらいは、少年中国学会は、多様な思考傾向を持った成年知識人が「ヤングチャイナの創造」という漠然とした理念によって

ゆるやかに結びついただけの社団に過ぎなかったという、イデオロギーに着目した従来の理解に挑戦することにある。著者は、少年中国学会に惲代英をはじめとする利群書社のメンバーが参加することによって、北京・上海と武漢との間に新しいソーシャル・ネットワークが形成されたことに注目する。学会員間での通信、直接の会合、定期刊行物の発行等により、少年中国学会は各地のネットワークを結びつける「ネットワークのネットワーク」として機能し、他の社団と同様にパーソナルな関係に立脚してきた状態から、非パーソナルで抽象的な「社会性」を生み出す組織へと発展したと論じる (p.107)。

第5章では、社団から政党へという転換がいかに行われたかを、惲代英の思想と活動の変化に即して考察する。ここでいう政党とは、大衆的基盤を有し、大衆を組織、動員する大衆政党を指す。利群書社の活動に限界を感じていた惲は、仲間と新しい道を模索するなかで「未来の夢」「革命の価値」等の文章を発表している。前者は陳独秀によって工読互助団などにも空想的社会主義の一つとして批判されており、これらはマルクス主義を受容する過程の「思想的矛盾」(李良明)の表れと見るのが通例であった。しかし、惲の「組織体系的思考の傾向」(p.130)に着目する著者は、これらの中の以下のような主張に、組織の重要性をめぐる惲の関心の深化を読み取っている。「我々がなにかを成し遂げようと思えば、まず死党を結成しないわけにはいかず、死党を結成しようと思えば、明確な共通の目標を設定しないわけにはいかない」。「革命は大衆の感情の爆発に過ぎない。……我々が理想とする革命家は、革命団体内部が充実するのを待ちつつ、機を見ながら一步一步〔革命を〕推進していく」。惲が利群書社の挫折ののち、「ボルシェビキ式団体」として共存社を結成したのも、こうした組織化を重視する惲の思考傾向の延長線上にある。

ただ、著者は惲の共産党加入には一種の「概念的転換」が必要であったという。それまで惲にとっての「社団」とは、将来の理想社会実現のための手段であるとともに、それ自体が目標の一部であった。一方、すでに存在する共産党への参加とは、「党」を変革のための手段として承認し、党のやり方に自らを適応させていかねばならないということの意味する。のちに惲は『中国青年』主筆として、当時の青年層に広範に見られた政党へ

の不信感を払拭すべく、政党はよりよき変革のための手段として有用であると読者に説いたが、惲が共産党に加入したのも、「イデオロギー的親近性および政治的変革の手段としての政党の効率性への信念」(p.141)からであると著者はいう。

以上、本書の骨格のみを紹介してみた。本書の特徴は、思想研究が中心であった既存の研究と一線を画して、敢えて思想・イデオロギーの分析を避け、組織化とそれをめぐる惲の思考に集中した点にある。砂山(1989)は、青年毛沢東が組織についての「自然レーニン主義」ともよぶべき「本能的理解」をもっていたというS.シュラムの指摘を紹介し、「しかしおそらく、組織への関心は(どのような組織を構想したにせよ)、1910年代半ばに思想的成長をとげた世代のある部分に共有されていた、というべきだろう」(砂山1989: 47の注107)と書いた。だが、重要なことは、やはり「どのような組織」をどのように組織するかという問題であることを本書は教えてくれる。この点で、小組織内でのディスカッション、雑誌の刊行、ネットワークの形成等のツールを通じて、大衆政党の組織化のための新たな「社会性」を獲得していったという著者の見解は、五四運動研究に対して新鮮な視角を提供していると評価できる。

しかし一方、本書を書評した森川裕貴は、対象時期を共産党入党以前にほぼ限定し、しかも限られた資料しか利用していないこと、日本の惲代英研究をほとんど参照していないこと、桑兵や章清らの中国における新しい研究動向を無視していること等を指摘し、「本書は取りこぼしが多すぎるのではないか」、「本書が誇る新しさは、真に新しいものとしては説得的に示されていない」と厳しい評価を下している(森川2016: 220)。森川の指摘は大部分首肯できるのだが、英語圏での惲代英研究がほぼ皆無であったことを考えれば、本書刊行の意義はやはり大きいであろう。

分析対象となった時期が入党前に限定されている点については、コートニー(Courtney 2016)も、資料が最も豊富な時期だけ焦点を合わせた「賞賛すべき儉約と十分な自制」とやや皮肉に批判している。惲代英研究者として著者を弁護するとすれば、『惲代英日記』がおそらくこの時期の資料としては際立って濃密かつ貴重な内容を含むために、それ以降の時期の惲について語る事が困難になるという逆説的な事態に直面してしまうので

あろう。死の直前まで惲は相当多くの文章を残しているが、党の政策の宣伝や他の党派との論争のための言説を、入党以前の言説を分析するのと同じ方法と同じ密度で分析するのは難しい。本書が分析の焦点とした組織化への関心が、惲の短い生涯を貫く基本テーマの一つであったとすれば、あえて思想やイデオロギーではなく、それを実現するための「方法」を分析の対象としたという著者の戦略は、決して間違っていないし、入党後の惲代英を考える上で重要な手がかりを提供していると考ええる。

こうした点で惲代英研究における本書の貢献は認められるものの、やはり大きな欠落感はある。その一つは、せいかく思想・イデオロギーではなく、「方法」としての組織化に注目したにもかかわらず、本書で示される著者の視野はさほど広くなく、また射程もあまり長くないのではないかという感を免れない点である。著者は、惲らの結社活動で培われた諸要素（小組織内での討論、雑誌の刊行、ネットワーク等）が大衆政党政治のためのインフラ形成に貢献したというが、大衆政党政治といっても、1920年代の中国の政治状況は、「大衆政党」の存在様式を短期間のうちに大きく変容させていった。ファンデフェンによれば、中国共産党は「社団との決別」を意味した結党準備段階から、中央集権的構造を備えた「大衆政党」へと成長するまで4つの段階を経たという（Van de Ven 1991：240-242）。社団活動のなかで形成された組織化のためのインフラは、このプロセスの初期段階の一部を構成するに過ぎないとすれば、五四時期の組織化をめぐる惲のヴィジョンと実践は、はたしてどこまで有効であったのであろうか。

このことと関わって第二に、惲らが獲得をめざしていた「社会性」とは具体的にどのような社会的内容を含むのか、明確ではない。コートニー（2016）が、惲の社団活動のメンバーの中に労働者や女性は含まれていないのではないかと指摘しているように、社団活動を通じて形成される「社会性」とは、知識人の間の形成される、限定された関係性にとどまるのではなかろうか。それがいかにして「大衆政党政治」のインフラになりうるのかについて、本書では十分な説明はない。明確でないのは「大衆」にもあてはまる。森川は「どういった人々を大衆と考えているか、実はあまり明確でない」（森川2016：217）と批判しているが、この点は惲代英自身の社会や大衆の認識とも関わっているように思われる。この時期の惲は、し

ばしば「群衆」を感情に駆られて動く存在として捉え、これを指導する知識人の役割について語っていた。こうした憚の大衆の捉え方と著者のいう「社会性」とはどのように関わるのか、考えてみる必要がある。

さらにもう一つの大きな欠落感は、ほかでもない著者が意識的に避けた思想・イデオロギー分析の不在である。五四時期に流通した多様な思想潮流のなかから、憚代英は組織化を巡ってどのような養分を吸収したのであろうか。日記を含め憚の当時の文章には、彼が読んだはずの新思想を正面から論じたものは少ない。前述の通り、彼は必ずしもそれらに全面的に賛同したわけではなかった。だが、同時に、憚は新思想が大多数の人びとを利するのであるならば、「旧思想を利用して新思想を広めるのが最もよい」という功利主義的な観点を長く維持していたように思われる⁹。そのため、彼が新思想を論じなかったからと言って、それに否定的あるいは関心が薄かったと断定するわけにはいかないのである。ラハープは互助社の設立に関わって日記にクロボトキンへの言及がないことをもって、互助社の設立メンバーはクロボトキンの著作を読んでいなかったのではないかと推測しているが (p.61)、いささか軽率な判断であろう。少なくとも互助社から利群書社までの憚代英の結社活動には、相互扶助による社会の進化という『相互扶助論』の主題を随所に見て取ることができる¹⁰。憚代英の組織をめぐる思考に対し、アナーキズム、リベラリズム、それにマルクス・レーニン主義はそれぞれどのような影響を与えたのであろうか。これを考えることは、憚の思想と行動を理解する上で重要であるばかりでなく、それらの諸思想が中国においていかなる役割や意義を持つ

9 日記 (1919年4月27日) には以下のような条が見える。「我々が新学説を信じるのは、純理の頭脳で純理の学説を信じるのではない。その学説が大多数の人に利益があるからである。大多数の人に利益があるからには、旧思想のうちの正しいものを利用して、新思想を普及することが最も便利な方法ではないだろうか。どうしても旧思想を一律に抹殺しようとして論議を巻き起こし、実施の妨げになるのは、新奇をてらおうとするのでないかぎり、全く必要のないことだ。」

10 砂山 (1989) は、憚代英がスペンサー流の社会進化論に対する反論として、クロボトキンの『相互扶助論』から大きな影響を受けたという仮説のもとに、憚の結社活動の意味を探求したものである。憚はあるアナキストへの書簡の中で次のように語っており、自らのアナキズムへの傾倒を率直に表明することは敢えて抑制していたと推測できる。「人には安那其を語らず、その精義を取って新学の名詞に託し、世人が受け入れ易いようにして、安那其に対する一切の阻力を消す。」(憚代英1981a: 266)。

ものであったかを考える上でも重要な意味をもつのではなからうか。この作業は「目的論」に陥りやすいとの理由で、避けて済ませることのできないもののように思われる。

おわりに

中国での惲代英研究の着実な進展、英語圏でのラハープの書の刊行と対照的に、日本では後藤（2003）を最後に惲代英に関する研究はほとんど中断状態にある。その原因は、資料上の制約ということ以上に、日本の中国近現代史研究のなかで五四運動全般に対する関心が低下した上、数少ない五四運動研究でもその後の共産主義運動につながる動きより、それと対抗した勢力の思想やジェンダー等の社会文化史的テーマに関心が移動した影響が大きいであろう。しかし、だからと言って、共産党初期指導者・活動家の研究が無用になったわけではない。むしろ、今こそ実証的な「書直し」の必要があるのは明らかである。筆者自身、80年代末に論文を発表したのち、共産党入党後の惲に関する続編の執筆を意図していたが、入党以前と以後の連続と断絶をどのように捉えるか考えあぐねて着手できなかった。上述したような新たな研究上の進展は、私自身への督促の意を込めて、日本における惲代英研究の再開の契機になるものと期待したい。

最後に、惲代英が彼の同世代の活動家のなかで占める位置について言及しておきたい。森川は、惲代英と同じような経歴をたどった人物が他に大勢いるにもかかわらず、「惲代英がなぜこれほどまでに注目されてきたのか」(森川2016:221)と問いかけている。五四時期の惲代英について言えば、『惲代英日記』等の資料の公開が1980年代早くに行われたために、「五四青年」の典型としてその言動の仔細な部分にまでアプローチが可能となったからということ、ひとまず言える。しかし、その結果得られたのは、予想されたような典型像とはいささか異なり、それからははみ出す部分の多い、ユニークな青年像であった。それに惹かれて、惲代英の研究が同時期に相次いで発表されたのであろう。しかし、論文数から言えば、決して多いとは言えない。「身体力行」を旨とした惲は、同世代の青年の中では際立って活動的であり、その影響力も決して小さくなかった。しかし、そうであるだけに、なおさら惲代英以外の「五四青年」（もちろん毛沢東を含めて）

についても再びあるいは新たに検討して比較することが必要であり、入党後の惲がその個性をどのように発揮していったのか、あるいは変容、摩滅させていったのかについても検討しないわけにはいかないであろう。

【参考文献】

* 単行本

石川禎浩 (2001) 『中国共産党成立史』 岩波書店。

惲代英 (1981a) 『惲代英日記』 中央檔案館、中国革命博物館、中共中央党校出版社編、北京、中共中央党校出版社。

惲代英 (1981b) 『惲代英来鴻去燕集』 張羽, 姚維斗, 雍桂良編注、北京、北京出版社。

惲代英 (1984) 『惲代英文集』 上・下、北京、人民出版社。

惲代英 (2015) 『惲代英全集』 全9巻、人民出版社。

趙泓 (2014) 『中國人的烏托邦之夢——新村主義在中國的傳播及發展』 台北、獨立作家。

李永春 (2005) 『《少年中国》与五四時期社会思潮』 長沙、湖南人民出版社。

呉小龍 (2006) 『少年中国学会研究』 上海、上海三聯書店。

人民出版社編輯部編 (1982) 『回憶惲代英』 北京、人民出版社。

李良明・王鵬程・李天華・鐘德濤 (2011) 『惲代英思想研究』 北京、人民出版社。

李良明・鐘德濤主編 (2005) 『惲代英年譜』 武漢、華中師範大学出版社。

中国革命博物館党史研究室編 (1980) 『党史研究資料』 第1集、成都、四川人民出版社。

章清 (2014) 『清季民国時期的“思想界”』 上・下、北京、社会科学文献出版社。

Rahav, Shakhari (2015) *The Rise of Political Intellectuals in Modern China: May Fourth Societies and the Roots of Mass-Party Politics*, New York : Oxford University Press.

Van de Ven, Hans J. (1991) *From Friend to Comrade: The Founding of the Chinese Communist Party, 1920-1927*, Berkeley : University of California Press.

Yeh, Wen-hsin (1996) *Provincial Passages: Culture, Space, and the Origins of Chinese Communism*, Berkeley : University of California Press.

* 論文

秋吉久紀夫 (1978) 「惲代英の思想」九州大学中国哲学研究会『中国哲学論集』4号、

33-47頁。

小野信爾（1979）「五四時期の理想主義——惲代英のばあい」『東洋史研究』38卷2号、1-38頁。

後藤延子（1982）「惲代英の出発——五四前夜の思想」信州大学教養部『人文科学論集』16号、1-18頁。

後藤延子（1987）「概念の再検討を：思想史の立場から」（「五四運動」をめぐる学術論争：五四運動研究シンポジウムの記録）『季刊中国研究』13号、73-79頁。

後藤延子（1994）「惲代英の五四時期の思想——日記を中心に（1）」信州大学教養部『人文科学論集』28号、1-22頁。

後藤延子（1995）「惲代英の五四時期の思想——日記を中心に（2）」信州大学教養部『人文科学論集』29号、1-29頁。

後藤延子（2003）「惲代英と武漢五四運動」『近きに在りて』43号、80-99頁。

砂山幸雄（1989）「「五四」の青年像——惲代英とアナキズム」『アジア研究』35卷2号、1-47頁。

砂山幸雄（2016）「惲代英の「安那其主義」の特質とその歴史的意義」『人民日報海外版日本月刊』2016年特刊（中国共産党創立95周年記念シンポジウム「五四運動と中国共産党書記の指導者」）、42-45頁。

狭間直樹（1989）「五四運動の精神的前提——惲代英のアナキズムの時代性」『東方学報』61号、359-385頁。

姫田光義（1986）「『惲代英日記』読書劄記——惲代英を通して“五・四”を見る」中央大学人文科学研究所編『五・四運動史像の再検討』中央大学出版部、463-483頁。

森川裕貴（2016）「書評 *The Rise of Political Intellectuals in Modern China : May Fourth Societies and the Roots of Mass-Party Politics*」『中国－社会と文化』第31号、214-222頁。

覃小放・余子侠（2009）「惲代英与基督教青年会」『華中師範大学学报』人文社会科学版、48卷6期、122-129頁。

鄧軍（2012）「「苦行嗟誰及」：惲代英与宋学的道德嚴格主義」『開放時代』2012年7期。73-85頁。

鄧軍（2016）「從“良心”到“主義”：惲代英与五四時期知識分子的社團組織困境」『中共党史研究』2016年4期、69-78頁。

段玉 (2015) 「惲代英思想研究綜述——紀念惲代英同志誕辰120周年」『理論与現代化』2015年3期、118-123頁。

李良明 (2016) 「惲代英独立探索健党的理論与实践」『決策与信息』2016年6期上旬、18-33頁。

潘大礼 (2015) 「惲代英入党問題再考」『蘭台世界』2015年3月上旬号、6-7頁。

夏海 (2005) 「惲代英研究中的兩個問題」『中共党史研究』2005年5期、113-117頁。

張艷麗·張建新 (2008) 「惲代英与陳独秀關係試析」『學術論壇理論月刊』2008年5期、41-44頁。

Courtney, Chris (2016) [Review] The Rise of Political Intellectuals in Modern China: May Fourth Societies and the Roots of Mass-Party Politics, *Reviews in History* (<http://www.history.ac.uk/reviews/print/review/1909>) (2016年9月12日)

Tillman, Margaret Mih (2016) [Review] The Rise of Political Intellectuals in Modern China: May Fourth Societies and the Roots of Mass-Party Politics, *The Journal of Asian Studies*, vol.75, no.2, pp.512-513.